

2009年度三重大学人文学部における

F D 活 動

報 告 書

2010年（平成22年）3月
三重大学人文学部

I. 2009 年度FD活動の総括

人文学部のFD活動は、本年度で7年目となった。学部の教員に、すでに定着している。本年度に実施したFD委員会の活動は、以下の方針で行った。

これまで6年間の積み上げの上に立ち、基本的な方向を継承し、教員各自のFD活動を支援していくことを、本年度の基本方針とした。FD活動には、一定のインパクトをあたえ続けることと、各教員の「有限な時間と有限なリソース」を、日々の研究・教育・学部活動に効率よく割り振ることを阻害しないこととの、双方が求められる。また、今日、各教員の教育資質を向上させる情報に接する機会は、学部FD委員会以外からも、つまり全学や学外からも多く提供されている。それゆえ、学部のFD活動は、学部単位でおこなうことのメリットのあるものに、特化する必要があると考えた。

また、大学院教育のFD活動の強化が求められており、今年度は、従来の7月研修会に加え、2月末から3月にかけての「三重の文化と社会」の学内報告会、学外（現地）報告会、修論報告会の3つのいずれかに教員の参加を促し、院生のレベルの把握を強化して授業展開の工夫を促すことの2本立てで行なうこととした。後者は「試行」である。なお、「三重の文化と社会」という科目は、毎年度、三重県内のひとつの地域を選んで、院生がフィールドワークないし文献調査を実施し、報告書を作成し、地元での住民に開かれた報告会を実施し、大学院広報誌『TRIO』への要約の掲載を行い、大学と地域の交流を図っている科目で、人文社会科学研究科の特色を打ち出しているものである。

以上のような方針に従い、本年度FD委員会では、6月・7月・10月・12月に研修会を行い、学生・院生による授業アンケート、授業参観、大学院生の報告会でのアンケートを実施した。研修会は、一昨年度から支持された方針を維持して4回とし、そのうち1回は外部講師による講演会にあてた。時系列順にすると、6月に2008年度の授業アンケートを元にした授業改善のための意見交換（学科のプログラム単位）、7月に大学院教育についての意見交換（大学院の専修単位）、10月に外部講師による現在の学生の質に関する「学力と適応力の現在」という講演会、11月から12月にかけて授業参観、12月に年間FD活動に関する意見交換（学科のプログラム単位）、2月末から3月にかけて大学院生の報告会への参加となった。なお、ハラスメントに関しては、本年度はFD活動の枠の外で2月の講演会が行われた。

2008年9月のリーマンショック以降、学生の就職環境が著しく悪化した。学生指導委員会と連動しての、「学生の就職問題に際する教員の資質の強化」についての研修会の開設も議論したが、実現に至らなかった。来年度以降も、FD活動という枠組みで行うかどうかは別として、学部として意識していかなければならないだろう。

6月の、2008年度の「学生による授業アンケート結果にもとづく授業改善の検討」は、授業アンケートのフィードバックを目的に、ほぼ毎年度実施してきたものである。報告者

のアンケート結果をもとに議論することによって、報告者に対して有益なアドバイスがなされるばかりでなく、個々の教員が他の教員の授業内容や方法、さらに改善の努力にふれて、自分の授業を振り返ることが促されている。こうしたことは、基本的なFD活動として根付いていると言えるが、マンネリ感も生じている。個々の教員の現行のFD活動への疑問は、より生き活きとしたFD活動を開拓していく際の重要な手がかりとなるであろう。FD委員会は、こうした声を真摯に聞いて、工夫を進めることが求められている。

他方で、全学で行われるアンケートの枠組みに、とくに文系学部である人文学部の意向や傾向が、必ずしも十分には反映されていない可能性がある。トップダウンにともなうメリットおよびデメリットに関して、全学と学部や個々の教員のコミュニケーションの回路が拡大されることを、希望する。

10月の研修会は、「学生の質が変化していることについて、大学の教員とは異なる視点からの情報を得たい」という意見にそって、東京の駿台予備校や塾で教えている栗田哲也先生を招いて、「学力と適応力の現在」という講演会を開催した。基本的な学習習慣が身に付いていない層ではなく、学力上位層に生じている積極性の低落に焦点を当てたものであった。忙しすぎて家にはいないことが多い父親と、子育てについて不安に思い、拠り所を求めて教育をアウトソーシングしてしまう母親の組合せが、家庭の文化資産を急速にすり減らしているという現象が指摘され、子どもは、塾で、高度な問題を自力で解くべきところを、次から次への指示の束を求めることに置き換えてしまったと指摘された。

教員の感想は、新鮮で興味深かったというものから、否定的な見解ばかりで、所与の難しい状況の中で講師が「自力で考える子ども」をどう育てているかという一番聞きたいことに触れて欲しかったという批判まで、多様であった。FD委員会の工夫のあり方についても批判がなされたが、めげないでチャレンジしてほしいというコメントもあり、励まされた。新鮮さと、「FD活動としての適度感」との間で、検討が進むべきであろう。

授業参観については、昨年度と同様、「参観したい授業」の希望を取り、希望のあった授業担当者に公開の可否を尋ねる方法とした。成立した公開授業は少なかったが、潜在的には、すべての授業が希望参観の対象となる形を維持した。ただ、教室のハード面に問題があって、参観希望者が参観できないということもあった。授業見学者・公開者へのアンケートは、IVに掲載したが、来年度の参考にして頂きたい。

12月の研修会では、例年通り、年間のFD活動を振り返った。継続することの意義を強調するコメントと、マンネリ感の表明、「有限な時間と有限な資源」のやりくりとFD活動の両立という問題の引き続いた提起とがあった。Vを見て頂きたい。なお、FD委員会からの案内についての批判も出された。猛省しているところである。

FD活動におけるアンケートは、学生・院生による授業評価アンケート、教員による授業評価アンケート、授業参観の実施者・参観者のアンケート、および本年度導入した大学

院のFDに関するアンケート（「三重の文化と社会」報告会、ないし修論報告会についてのアンケート）と、多くある。学生・院生による授業評価アンケートは、前期後期ごとに全学で一斉に行われるマークシート式アンケートの一貫として行っている。教員による授業評価アンケートは、それと同時期に、学部独自で、教員に科目ごとに行っているものである。どちらのアンケートも、質問項目は継続性の観点から昨年とほぼ同じものを使った。アンケート集計結果については、IV・V・VI・VII・VIIIで分析しているので、見て頂きたい。

大学院に関するFD活動は、院生の質に関して「ばらついている」ということがしばしば言われるが、それが具体的にどのようなものか、指導院生以外についても特講科目という授業ではない、本人の目標設定によるまとまった研究をしているところに、実際にふれてもらい機会となった。7月研修会で大学院を扱い続けるかどうかや、報告会やアンケート結果をどうフィードバックするのかは来年度以降の課題となるが、大学院全体としての院生への指導を機能させていく方向が、見えてきたように思える。

本年度は、政権交代という政治的大事件があり、新政権の手法として「事業仕分け」が注目を集めた。教員の仕事についても大いに仕分け（取捨選択）が必要となっているだろう。教員が、授業や授業の準備に納得のいくエネルギーを投入できる環境の整備が求められているのである。FD活動もそれに資するため、効率的な運営や、研修内容の企画について、いっそうの努力が求められている。

2010年3月 人文学部 FD委員長 岩本美砂子